第 11 期事業報告書

（２０１４年４月１日から２０１５年３月３１日まで）

特定非営利活動法人アーシャ＝アジアの農民と歩む会

はじめに

今期も、昨年度同様、北インド・ウッタルプラデシュ州アラハバード県にあるサムヒギンボトム農工科学大学継続教育学部（マキノスクール）を中心に、多岐に渡る国際協力活動を大過なく展開できた。これは、多方面からの支援・協力、協働を得られたことによるものであった。心より感謝したい。

インドでの事業に於いては、概ね計画に沿って実施され、農村在住の人材育成の成果が目に見える形で現れるようになった。特に、有機農業組合活動、母子保健、貧困家庭の子どものための農村教育、裁縫教室を軸とした農村女性の能力開発と収入向上事業に於いて、以前に比べ、農村の人々のリーダーシップが発揮され、自立的な活動が活発に行われるようになった。これも、本会より派遣されている現地日本人スタッフ（川口景子、大木恵利）、専門家(三浦孝子、高丸和彦、原田敏幸)、インターン（涌泉香織）等の誠意ある尽力によるものであった。インドの気候風土、衛生状態等、日本のそれらとかなり違うところで、大病も、事故も無く活動できたことは幸いであった。重ねて感謝したい。

昨年度の懸案であった新拠点の購入が 2015 年 5 月中に成される運びとなった。この新拠点は国内事務、広報・募金の強化、インド派遣スタッフ等の宿泊、会合等に用いる計画であるが、日本のアーシャを支援してくださる方々、協働して活動を計画されている方々にも使っていただけるような拠点にしたいと考えている。

日本国内に於いては、愛農会との協働により、9 月、2 月にインドスタディーツアーを実施することができ、参加者、またその関係者に対しインド事業への理解を深めていただき、アーシャの支援者が増えたことは大きな収穫であった。このツアーはアーシャの活動支援や、協働作業を計る上で大きな役割を果たした。例えば、ツアーメンバーがアーシャ会員となり、寄付してくださったり、彼らの子弟を学部（SCSAD）へ学生として送ってくださったり、又はアーシャの派遣職員や現地職員の研修を引き受けていただいたりと、当ツアーによる支援やネットワークが広がりを見せている。今後、企画、及び現地での受け入れ体制などを更に改善しながら、ツアーを継続させていくことはアーシャの重要な活動の一つと位置づけられた。

昨年度より行われた、アーシャ学校児童の絵画展が大田原市の那須野が原ハーモニーホール、山形県鶴岡市等で開催された。一般市民の方々にインドの農村状況、インドの子ども達について理解してもらうよい機会となった。特に、鶴岡市で行われた荘内教会保育園との共同での絵画展は来場者にとって興味深いものとなった。会場には募金箱等も置かれ、それをアーシャへ寄付してくださった。この絵画展覧会の目的をより明確にし、アーシャ学校教育の必要性の理解を深めてもらう機会にするのと同時に、同校の教育支援（例えば奨学基金や里親運動等）となるような活動にすることが肝要かと考える。

以下は各分野の活動報告である。

１．農村開発・農業開発支援事業

1-1. 環境保全型　鴨・稲作同自作　普及システム構築事業

環境保全、食生活、収入向上に寄与できる合鴨稲作同時作普及システムの構築に対する支援を行っ

た。今年度は特に、鴨の人工孵化技術、現地に適合した水稲稲作との技術開発を行い、環境保全型農業の普及を推進すると同時に、農家の所得と食生活の向上に寄与するような普及教育を実施した。

専門家として、２０１４年８月に熊本県で合鴨孵化場を経営している原田敏幸氏を８月に招いて、孵化技術を助言、指導していただいた。具体的には、同氏の滞在中、農場スタッフ、アラハバード有機農業組合栽培農家に対し、継続教育学部の持続可能な農業農村開発センターで「第１０回持続可能な農村開発セミナー」を開催し、原田氏に講師をしていただいた。

1-2. 持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）運営支援および研修所の環境向上

今年度は、インド人 3 名（アラハバード県、メガラヤ州、ジャルカンド州）と日本人１名、合計 4 名であった。9 カ月の研修を 3 月 24 日に終え、それぞれの所属する郷里に戻った。ジャルカンドの卒業生は 6 月下旬よりインターンとして継続教育学部農場部門で研修を続ける予定である。

また、SCSAD コース実施にあたって、本会からの派遣スタッフ、インターン、専門家はそれぞれの専門知識、技術を用い尽力した。

アラハバード県内からの卒業生は 4 月より裁縫事業のアシスタントスーパーバイザーとして継続教育学部に就職する。メガラヤ州からの卒業生は NGO ベサニー協会で農村部のフィールドワーカーと復職し、日本人卒業生は沖縄大学 4 年に復学した。

人数が少なかった分、濃密な研修になったが、やはり当学部の 9 ケ月コースとして効率をあげるには 10 人前後の学生の確保が必要と思われた。今後、学生募集により有効な手段を講じる計画である。

1-3. 貧困農民のための収入向上活動事業

有機野菜、日本米、ニーム製品、入浴剤、加工食品（特に、味噌、醤油、食肉加工品、漬物、乾燥キノコ、乾燥モロヘイヤ）の質の向上と販路拡大のための支援を行った。特に、今期に於いては、組合農家の栽培技術、加工技術の向上と市場開拓が噛み合い、アラハバード有機農業組合の収益が伸びた。特に、日本米、味噌の販売先がインド各地に固定客として得ることができ、消費者ネットワークに広がりを見せている。特に、デリーでは日本人ボランティア会のメンバーによる販売協力は効果的な市場開拓につながっている。これらのことは大きな成果であったといえよう。上記の活動を行うために、現地の日本人スタッフの存在は不可欠である。これらの成果は、インド人スタッフの育成に関わっている日本人派遣スタッフ及び組合に主に関わった日本人インターン（涌泉）の存在が大きかった。

このような活動の拡大は様々な問題、困難に直面する。これらの問題に対処できる組合スタッフの育成を更に強化、組合の組織運営に関する助言活動を来期以降も実施する必要性がある。

1-4. 持続可能な農業普及支援・SHG 組織作りに対する支援

①若い人材の育成と総合的な農村開発の推進

昨年同様、若い農村住民の人材を発掘し、草の根リーダーの可能性を持った人材育成を行った。また、育成された人材が統合的農村開発の役割を果たすことができるように、派遣された現地スタッフ及び専門家は技術協力、助言を行った。今期はアラハバード県ジャスラ郡カンジャサ村出身の女性、ルマ・ニシャドを継続教育学部 SCSAD で学んでもらうために奨学金を寄与した。上述したように、彼女は４月より当学部職員として採用され､農村女性のための裁縫事業の推進役として期待されている。

②希望農民学校及び持続可能な農村開発研修センターの効果的な活用

上記の事業をより強固にするために、２０１１年度に設立された「持続可能な農村開発研修センター（継続教育学部の３階)」、本会と JICA の支援によって建てられたアラハバード県内の農村４カ所に設立された希望農民学校、及びジャスラ群のマエダフィールド事務所を多目的に活用できるように、協力、助言活動をした。そこでの活用内容は、アーシャ学校教師の合同月例会議、有機農業の普及、農村住民リーダー育成、農村保健ボランティア（VHV）の月例会議、ウィークリーミーティング、子どもの教育、農村女性の社会的地位と収入向上等である。さらなる農村改善のために、上記会場をフル活用しながら、住民の生活向上を図ることに寄与した。

③収穫感謝祭（HTC）開催の支援

２０１５年２月２２日、アラハバード県ジャスラ郡カンジャサ村に於いて HTC を実施した。今期は、アーシャ学校の教師がリーダーシップを取り、継続教育学部、農村母子保健ボランティア（VHV）、裁縫クラス教師及び生徒、アラハバード有機農業組合が合同で実施することができた。様々な分野の農村開発に関わる村民がこのようなイベントで協力し合うことにより、継続教育学部の活動を地域の人々に理解してもらえること、また様々な活動を協働で行うことによってより効果な活動ができることを現地スタッフやボランティアに理解してもらうよい機会であった。

HTC には、インドスタディーツアーの参加メンバーの皆様にも参加していただいた。

２．人材育成支援事業

2-1. 未就学児のための初等教育施設 設立運営支援事業

アーシャ学校の生徒 570 名に対し、奨学金を供与した。

2-2. 研修生への奨学金

ミャンマー・カチン州出身の女性、Ms. Zawng Nyoi（SCSA の卒業生）が今年度５月末で卒業（家政学学士）したので、同月でその供与は打ち切った。卒業後彼女は帰国し、カチン州にある農業学校の園芸教師として仕事をしているとのことである。

また、７月より、SCSAD に新たに入学する裁縫学校講師のルマに奨学金を供与する。また、その他にも SCSAD で奨学金が必要な学生にも供与を予定している。

2-3. 僻地農村学校の自立運営に向けた総合的教育支援事業

① アーシャ学校（3 村、3 校・生徒数、約６５０人）の運営と教育内容改善のための支援を行った。生徒に対する環境教育、農業教育、女子保健教育、美術教育を特別学習プログラムとして支援した。4～5 年生を対象に男女 100 名を選抜し、女子生徒には主に思春期性教育、基本的な栄養知識と調理実習、男子生徒には農業と科学についての教育キャンプを 2 泊 3 日、継続教育学部訓練センターで実施した。

② アーシャ学校教師への研修支援は、教師としての資質を向上できるように、継続教育学部で年２回教師のセミナーを実施した。各回 16 名の教師が参加した。

③ アーシャ学校ギンジ校クラスルームの増設工事、及び土床をコンクリートにするための支援及びカ

ンジャサ校の屋根の修理支援をおこなった。

④ アーシャ学校の生徒に対する奨学金寄与として、1 人当たり 25 ルピー（約 50 円）の奨学金を供与し、アーシャ学校教師で運営されるアーシャスマイル教育協会を支援した。これは学校運営を各村の教師で自立して行えるようにするための戦略でもあった。まだ、教師の力不足はあるが、村で行う学校運動会、収穫感謝祭等以前に比べ、自主的な参加が促進されている。

⑤アーシャ学校にとって念願でもある政府登録は、前年度と同様、今年も様々な規制に阻まれ、登録はかなわなかった。しかしながら、小学校レベルを修了した後、政府登録のある中等、高等学校へ在籍し、実際には、アーシャ学校ギンジ校に通いアーシャ学校での勉強を続ける生徒が増えてきている。正式な試験は政府登録校で行うが、授業はアーシャ学校で受けるという２重登録であり、それらの家族には大変な財政負担となっているが、ギンジ校での教育の評判がよいため、このようなことが起こっていると考えられる。今後の検討課題である。

2-4. 裁縫学校の新規開設・運営支援、裁縫によるフェアトレード製品の開発支援

農村女性の収入向上のための事業として、３か所の希望農民学校で行われる裁縫基礎コース（６か月コース）の研修を支援した。当初 4 か所を計画していたが、マエダ校の裁縫教師が急遽、大学進学することになり、開催できなくなったことで、３か所となった。更に、バルゴナ校の教師が自宅で裁縫教室を始めたため、バルゴナ校に生徒が集まらず、開校後 1 か月で閉校を余儀なくされた。今後、このような事態が起こらないように、更に能力と熱意のある教師の育成に力を入れる必要がある。カンジャサ校とハルディー校には、常時各 20 名の農村女性が裁縫技術を学んだ。3 月 24 日、全てのコースを修了した者 12 名（40 名中、出席率や月謝の支払いを評価に含め最終的に選出した人数）に修了書を継続教育学部学部長の名で授与した。また、コース修了後、優秀な研修生、卒業生、教師 12 名を選抜し、上級コース（２か月コース）の支援を行った。

３．農村保健衛生改善支援事業

政府保健機関スタッフと農村保健ボランティアの協働による統合的母子保健事業

２０１４年度も当事業を推進し、政府機関保健スタッフと農村保健ボランティア（VHV）の協働によってモデル的な住民参加型母子保健・栄養普及活動が構築されることを目的とし、VHV の育成と継続可能な母子保健活動の体制と仕組みを確立し、適切な母乳育児、補完食、健康栄養に関する啓蒙と普及活動を行った。この事業推進のために三浦孝子を短期専門家として派遣した。今期において、今まで行ってきた活動に加え、新たな地域での活動紹介集会、栄養改善のためのモリンガ（西洋ワサビの木）の普及を強化した。

この保健活動に関わる VHV およびその候補生は常時４０～５０人と大きな組織になっている。広範囲な農村で行われる活動をする中で、たくさんの農村女性リーダーが育成されていることは大きな成果であった。また、今年度のモニタリングの村ための村落調査によれば、VHV の活動は地域の母子保健にポジティブな影響があることが確認された。この事業は後２年半継続する計画であるが、今まで行ってきた戦略、アプローチ、方向性に大きな修正は必要ない。

４．事業を推進するための調査研究及び、啓発・広報活動

4-1. ワークキャンプ・スタディーツアー開催、訪問者受入

①スタディーツアー（協働共催：公益法人全国愛農会・インド三浦後援会）ワークキャンプ・スタディーツアー開催

●第一回目　2014 年 9 月 6～15 日

全国愛農会事務局の中西泉氏がこのツアーの引率をしてくださった。参加者は５名と少人数であったが、継続教育学部での活動、インド農村の現状を知ってもらうよい機会を提供できた。また、ツアーメンバーと継続教育学部の活動に関わっているスタッフや村民との交流が深められたことは大きな収穫であった。

また、参加者された全国愛農会事務局長、山本和宏氏、愛農学園農業高校教師、泉川重利氏は AOAC 及び学生にうどん打ちを、泉川氏はアーシャ学校の教師に陶器づくりの講習を引き受けてくださった。

●第二回目　2015 年 2 月１９日～３月１日

内容的には前回とほぼ同様であったが、参加者は１６名と多かった。前回のコメントを参考に、アラハバード滞在を長くし、継続教育学部のスタッフ、学生との交流、学びの時間を持てるように工夫した。結果として、参加者からはポジティブなコメントを多くいただいた。今後もこのようなツアーを継続する意義は大きいと思われる。

4-2. 会報の発行

アーシャの活動、サムヒギンボトム農工科学大学継続教育学部のプロジェクトの報告を会員、支援者に理解していただくために年 4 回アーシャの機関紙を発行した。これらの編集、印刷、発送はインドにて行った。

4-3. ホームページ等での広報

ホームページ、ブログ、Facebook、Twitter、gooddo 等、広報の充実を図り、より広く当会の活動を知ってもらい、当会の認知度向上、会員増強を狙う努力をした。これらの広報活動が功を奏し、有機農産物に関する問い合わせ、セミナーへの申し込み、スタディーツアーに関する問い合わせが増えている。

4-4. １０周年記念事業

①10 周年記念誌作成

アーシャが発足するまでの経緯、活動の歴史、年表、写真、対談記事、寄稿をもとに、A５版の冊子を製作、２０１４年度に完成、発送の予定であったが、今期には実施できなかった。

②10 周年記念会開催

JICA 東京において１０周年記念会セミナー・報告会を行った。参加者は３８名。講師として、JICA 東京 吉川正宏氏にご登壇いただいた。また、当会関係者により「インドの農村を変える日本食材づくり」「笑いヨガ体験」「現地スタッフインタビュー」を実施。多くの方々に好評をいただいたセミナーとなった。

③10 周年記念ビデオ制作

当会の理事である佐藤耕士が中心となり、本会活動記録ビデオが制作された。日本語版、英語版両方あるので、日本のみならずインドでも役立っている。国内では、特に、セミナーや絵画展などで本会活動紹介のために、頻繁に活用された。２０１５年度の活動に大きな変更がなければ、このビデオは引き続き活用予定である。

④当会のロゴマーク作成

10 周年を記念し、当会の顔となるロゴマークを作成した。会報やパンフレット、ホームページ、Facebook、チラシ、名刺等に活用し、当会のイメージ戦略の一つとした。

⑤現地スタッフ招待

２０１４年の１０周年記念事業のために、継続教育学部からインド人スタッフ、ニッテン・クマール、サントシュ・クマールの２名を日本に招待した。当会のセミナー等に参加すると同時に、日本での研修を実施した。研修地は栃木県那須塩原市、埼玉県、岐阜県、愛知県、三重県、熊本県、福岡県と日本各地で組合、有機農業、有機農産物販売、普及教育研修等の広範囲の学びを提供することができた。各地でこの研修に協力してくださった方々に感謝したい。

⑥アーシャ活動拠点となる物件購入のための調査

新たな活動拠点となる物件を購入するため、新拠点委員会を立ち上げた。委員会メンバーは、リーダー：飯沼淳子、メンバー：原田時近、三浦孝子、丹羽寿美　アドバイザー：原田明子　書記：君嶋みのりである。このメンバーにより、必要な物件の条件の洗い出しや間取り、スペース、立地等検討を行った。検討を重ねた上、現地スタッフの意見も取り入れ、那須塩原市槻沢の物件の購入を委員会にて決定した。

4-5. 日本国内における学生及び市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、及び参加

①当会主催セミナー開催

2014 年 4 月 18 日（金）

活動報告会「インドと日本の子育て支援、人を育てる」講師：三浦孝子

会場：那須塩原市長寿センター　教養講座室　参加者３５名

2014 年 6 月 14 日（土）

10 周年記念セミナー「国際協力の展望と実践～インド農村の人々とともに未来を築く～」

会場：JICA 地球ひろば（東京・市ヶ谷）参加者３８名　詳細は 4-4　②参照。

2014 年 12 月 20 日（土）～23 日(月)　「インドの子どもたちの絵画展」

会場：那須野が原ハーモニーホール（栃木県大田原市）　来場者３００名

ボランティア：アーシャ理事、会員、国際医療福祉大学学生など　述べ２８名

絵画展期間中に実施したセミナー・ワークショップ

12 月 20 日(土)

「北インド、子どもとお母さんの健康を支える農村保健ボランティア（VHV)」講師：三浦孝子

12 月 21 日(日)

「インドの僻地の子ども達と教育～農村教育と農村学校の取組み～」講師：三浦照男
12 月 22 日(月)
「心を健やかに　インドから生まれた自然医療アーユルヴェーダ教室」講師：榎　尚子

②インドプロジェクトの報告会・勉強会研修会の実施
アーシャ理事である三浦、現地スタッフ・川口、大木、インターン・涌泉及び現地人スタッフ・ニッティン、サントシュ 6 名は熊本、福岡、三重、愛知、東京、埼玉、栃木を中心に日本での組合活動、収入向上、食品加工、有機農業、合鴨作同時作、キノコ栽培等の研修を行った。この研修費用はアジア生協協力基金の支援によって行った。

4-6. 次期事業形成調査

本会理事であり、現地事業総責任者である三浦が上記の研修の機会や 5 月中旬から下旬にかけて、北海道や山形、愛知、三重等の本会関係者や支援者と会い、今後の連携方針について話し合いを持ち、次期事業形成のための調査、連携強化を行った。6 月 10 日に、全国愛農会を訪問し、今度の協働体制等についての話し合いを当会幹部と話し合いを行った。

５．緊急支援活動事業

２０１４年度は実施しなかった。

６．その他の事業

6-1. バザー、チャリティ事業

以下のバザーへの参加を実施した。AOAC 製品販売の他、チャイ・インド雑貨・モリンガドリンクなどの販売、活動紹介、ヘナタトゥー、サリー着付けなどを行った。
2014 年 7 月 26 日（土）那須☆インドフェスティバル出店
会場：アジアンオールドバザール（那須町）
2014 年 10 月 11 日（土）・12 日（日）収穫感謝祭出店　会場：アジア学院（那須塩原市）
2014 年 10 月 25 日（土）フェアトレードまつり出店　会場：バンバ広場（宇都宮市）
2014 年 11 月 1 日（日）協働フェスタ出店　会場：宇都宮駅前広場
2014 年 11 月 29 日（土）那須インドフェスティバル出店　会場：アジアンオールドバザール（那須町）

6-2. 手工芸品等物品販売事業

収入向上支援、調査、販売、新製品開発収入向上事業推進のためのマーケット開発・販売活動を実施した。
現地派遣スタッフはアラハバード有機農業組合の製品の販売を促進するために帰国時に日本でのマーケット開発を行い、また国内スタッフは、収入向上支援のためアラハバード有機農業組合にて生産された商品を国内にて販売する支援活動を開始した。主としてインドハーブ入浴剤、岩塩、モリンガを中心に行った。

6-3. 演奏会、展示会、図書出版等の文化事業

12 月 20 日～23 日に絵画展を開催。詳細は 4-5 参照。

７．その他

（1）人事

２０１４年度の人事は以下のとおり。

② 三浦照男：プロジェクト総責任者

②川口景子：２０１３年７月より、３年間の契約でインドに派遣中。今年度も現地常駐スタッフとしてプロジェクト形成、インドプロジェクト総務及び会計主任。

③ 大木恵利：２０１２年７月より２０１４年６月迄現地でインターンとして現地に滞在。２０１４年７月より３年間の契約でインドに派遣し、現地調査、組合活動支援、研修事業、プロジェクト形成、学部長補佐の業務。

④涌泉香織：２０１４年７月よりインターンとして１年の契約で現地派遣。主に、マーケティング開発、食品加工、及び会計補佐をしながら研修を行った。

⑤三浦孝子（栄養・母子保健分野専門家）インド派遣：技術指導、助言活動

⑥原田敏幸（アヒル人口孵化と鴨稲作同時作に関する専門家）インド派遣：技術指導、助言活動

⑦高丸和彦（食品加工、組会運営専門家）インド派遣：技術指導、助言活動

⑦丹羽寿美：国内事務局にて、総務事務、会計、プロジェクト国内調整担当として雇用。

⑧君嶋みのり：国内事務局にて、広報、マーケティング、事務補助・渉外担当として雇用。２０１５年１月より育休中。

派遣されたスタッフ、専門家は、それらの活動の成果を、日本において市民向けのセミナーや講演会などを通じて、開発教育、市民教育、国際協力等の活動に携わった。本会の運営を強化するために、会員の募集、支援金の確保に努めた。

５．事業の実施に関する事項

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者人数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額（千円）
1.農村開発・農業開発支援事業	①環境保全型　鴨・稲作同自作普及システム構築	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	3名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区30万人の農村住民	801
	②持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）運営支援および研修所の環境向上	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	3名	研修生８名および研修生の活動地（インド メガラヤ州、マニプール州、日本）の農村住民各 1000 名	1,102
	③貧困農民のための収入向上活動事業	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	3名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区30万人の農村住民	1,048
	④持続可能な農業普及支援・SHG組織作りに対する支援	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	3名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区30万人の農村住民	115
2.人材育成支援事業	①ﾐｬﾝﾏｰ・カチン州の研修生への奨学金	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	1名	ﾐｬﾝﾏｰ・ｶﾁﾝ州研修生1名およびﾐｬﾝﾏｰの開発 NGO200 名	15
	②初等教育施設に通う子供たちへの奨学金	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	1名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区　550 名	206
	③へき地農村学校の自立運営に向けた統合的教育支援事業	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	2名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区　550 名	1,331
	④裁縫学校の新規開設・運営支援、裁縫によるﾌｪｱﾄﾚｰﾄﾞ製品の開発支援	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	2名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区　550 名 ﾐｬﾝﾏｰ・ｶﾁﾝ州研修生1名 SCSA 学生２名	758
3.農村保健衛生改善支援事業	①健康栄養・農村母子保健の事業支援	通年	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区	4名	ｲﾝﾄﾞ・ｱﾗﾊﾊﾞｰﾄﾞ地区30万人の農村住民	19,306
4.事業を推進するための調査研究及び、啓発・広報活動	①ワークキャンプの開催・研修ツアー（2回）・訪問者受入	随時	日本	5名	日本国内 300 名	784
	②会報の発行	年４回（6・9・12・3 月）	日本・インド・米国	5名	日本国内、インド・米国 述べ約 1000 名	240
	③ホームページ等での広報	随時	日本・インド・米国	1名	日本語・英語が読める不特定多数	30
	④10 周年記念事業　活動紹介ビデオ普及、記念セミナー開催、ロゴ活用、記念誌作成	随時	日本	3名	日本国内 約 500 名	926
	⑤日本国内における学生及び市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、及び参加	随時	日本	5名	日本国内 300 名	378

	⑥次期事業形成調査	随時	日本・インド	2名	日本、インド、ミャンマー	0
5.災害や紛争などによる被災住民への緊急支援事業	緊急支援活動事業	随時	未定	1 名	未定	0
合計						27,040

(2)その他の事業

事 業 名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	事業費の金額（千円）
バザー・チャリティ事業	バザー出店	随時	日本	2 名	0
手工芸品等物品販売事業	収入向上支援、調査、販売、新製品開発	随時	日本・インド	3 名	562
演奏会、展示会、図書出版等の文化事業	絵画展の開催	2014 年 12 月	日本・インド	3 名	0
合計					562